

## 5月をうたう俳句集から

「新緑の檜の葉返し風光る」——むせるような若緑の山中を歩く。木々の葉が薫風に薄緑から白く翻り波のように伝わっていく。天には燦々と光を注ぐ太陽。桜花が若葉に代わると一気に初夏の風情がやってくる。そんな“山笑う”5月の前半を17文字の句集から拾ってみた。(冒頭と最後の句、文中の解説は筆者)

1日

「つばめ」 つばめ来る覚えの色の黒を着て (鷹羽 狩行)

家の軒下や駅の天井につばめが戻ってきた。半年以上も前の古巣をよくぞ覚えているものだ。同じ黒い燕尾服。空を切るスピード滑空も変わってはいない。「つばめさん、お帰り」。詠者の温かな歓迎の心だ。



3日

「憲法」 この国は何処行く 憲法記念の日 (稲畑 廣太郎)  
九条の国薫風を深く吸ふ (藤原 はる美)  
九条や家族揃いて子供の日 (増田 甚平)

日本経済の先行きに明るい兆しが見えてきた。一方で“強い日本”への憲法論議が気になるところだ。「戦争放棄」の条文は平和を守る強力な芯となってきた。これこそ日本が世界に誇れる国力であり、資産であり信用である。家族が揃って子供の日を祝うことができる——こんな平和な光景を絶対に壊してはいけない。

5日

「鯉のぼり」 山寺の高き石段鯉のぼり (高倉 恵美子)

山寺へと続く石段の途中か登り切った広場だろうか。その脇に立っている鯉のぼりが、新緑の中で風になびいている情景が目にはさわやかに浮かんでくる。



6日

「夏立つ」 夏立つや少年帽の横向きに (能美 昌二郎)

ひと冬が過ぎて少年もまた少し成長した。カッコよさを気にする年齢にもなったのだろう。横向きの帽子は仲間たちを意識した気どりかもしれない。

7日

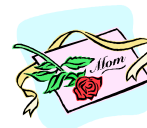
「筍」 筍の頭をおさへる幼児かな (菊地 恵子)

地面からニョキニョキと顔を出したタケノコ。一晩で10センチ以上も伸びることもある。そんな生命力あふれるタケノコの頭を押さえる幼児の仕草が可愛い。

そして第2週の日曜日は「母の日」。

母の日に贈ることばにリボン掛け (小張 志げ)

「ことばにリボンを掛ける」との表現が素敵である。母はすべての命のもと。365日が感謝の日々だが、この日は特別な想いを込めてことばを贈るのだ。



万物躍動の季節がやってきた。生命力にあふれてフレッシュな前進をしたいものだ。

新緑をいのちで呼吸この幸せ